

追悼

松本さんの思い出

本年1月11日、お茶の水の銀座アスターでの熱測定振興会の役員会でお会いしたのが、松本さんと私の最期の出会いとなりました。その翌々日の13日、松本さんは自宅で寝込まれ、1月17日は兵庫県南部地震で罹災、自宅に住めなくなり20日から疎開、一方その後松本さんは日大駿河台病院で肺癌の診断を受けられ、5月上旬には御入院、その後川崎市立井田病院のホスピス病棟に移られ、私が8月10日、7ヶ月の疎開生活から仮修理のできた自宅に戻って間もなく8月24日、73才で松本さんは不帰の客となられた。誠に心淋しい限りである。この半年余、私は松本さんのことが気になりつつも、自分の被災ショックと心身の疲れのとれぬ疎開生活を続けたため、平常心を充分回復しなかった。このような次第で、松本さんとの30年にわたる御厚誼に充分お応えする直接の御見舞の機会を逸し、誠に残念至極であるとともに、本当に心残りであり誠に申し訳ない。

私が松本さんに初めてお会いしたのは、昭和41年科学技術社の事務所が日本橋兜町にあった頃である。第2回の熱測定討論会（1966年）が東京の科学技術館で開催され、初めて外国人講演者として Prof. Westrum が来られたが、この会の世話人は向坊隆さんと益子洋一郎さんであった。その一人益子さんが、これからこの討論会が発展するためには有能な事務局長が必要であると助言して下さい、松本さんを御紹介され、築地の料亭で歓談の一夕をお世話いただいた。爾来30年の御親交をいただき、熱測定研究会（1969年より）、日本熱測定学会（1973年より）主催として、熱測定討論会が毎年全国各地で開かれることとなったが、松本さんは終始討論会と学会の運営に親身にお世話下さり、1987年学会事務局を今日の事務所に引き渡した後も、熱測定振興会をお世話下さり、それこそ30年の永きにわたって学会発展に御尽力下さった。特に御世話になったのは1977年我国で行われた第5回国際熱分析連合学会（京都）で、この時は神戸さんが国際学会側会長として御尽力、一方松本さんは我国の主催国としての準備、運営、万端にわたる事務を取り仕切って下さった。ここで一言付言したいことは、松本さんは徹底して学会会員でない自分の立場を堅持され、常に目立たぬ役目を貫かれたことであろう。1987年以降は後進に道を譲り、御自身は学会を愛する外郭団体としての

振興会をお世話下さったのも、この精神の現れであった。

ここで一言、松本さんのお人柄に触れつつ思い出をお許し戴きたい。御本人は台北高等学校から京都大学法学部政治科の御卒業で、自然科学系の御出身でないにもかかわらず、科学と似非科学とを峻別する鋭い直観力を持っておられ、学問を愛する人を識別する厳しい批評をされた。その結果、好き嫌いが極めて明確にしておられた。本分を守り誠実な人々を愛されたが、そんな立場で学会の正常な運営について時には忌憚のない鋭い意見も述べられた。しかしお話を聞いた後はいつも爽やかな雰囲気での歓談がつづいた。何よりも酒を愛され、自ら「白炭」と号してのボトルを酒場に置かれて振舞って下さった。また事務室では特にパーボンのWild Turkeyの12年物を愛飲され、来客と楽しい時間を過ごされ「Wild Turkeyを飲む会」を大切にしておられたと聞く。上述のような大学御出身のためでもあろうが、時世を憂う世評や人物評を拝聴するのも私の楽しみの一つであった。

上述のように1987年事務局長を辞任されたが、その時点で学会としては、何とか総会の席上で松本さんの永年の御功績を顕彰して感謝状を贈呈することを計画したが、御本人は断固としてそれを断られた。その心情を御察して、当時近藤さんと谷口さんのお世話で1988年7月15日、京都木屋町の料亭「栄屋」で松本さんを囲む会が催された。これには松本さんも喜んで参加して下さいだったが、ここに掲げた写真はその時の参加者全員で、松本さんはICTAの赤いネクタイを締め、清水焼の記念品を抱えておられる。ここにも松本さんの本領が躍如と発揮され、ほほえましい。その後1990年以降、多少私事に涉り恐縮であるが私の毎月の学士院例会出席の前日の上京を利用して御息隆史さんを従えて、古い在京の会員とともに毎年数回、近隣のレストランで歓談する「松本パーティー」を開いて旧交を暖めて下さった。その懐かしい最近の思い出が私の胸を締め付け続けている。

思えば私と松本さんとの交遊は30年間続いたが、お会いするたびに学会でも事務室でも、あるいは酒場でも、いつも自らの信ずることを率直に述べられ、毅然として弾ることがなかった。しかも人を傷つけることもなく本質を正し

く述べ、小事にこだわることなく楽しい酒をたのしまれた。学会運営についても私共の見落としがちな点をずばり御注意下さったのは本当に有難かった。御本人としては自分の立場をいつも明確にして楽しい、人に愛される人生を送られたと思う。

本名；秋（みのる）、松本直史さんは、その自分の人生観を集約した戒名「眞誠院徹信禪道居士」を自ら残されて旅立たれた。ここに謹んで御冥福をお祈りする次第である。

(1995年9月末日 関 集三)



松本さんを囲む会（1988年7月15日）

京都木屋町「栄屋」にて

後列左から 小沢、十時、山内、村上、畠山、草野、谷口

中列 上平、高木、菅、中村（茂）

前列 近藤、矢沢、大塚、松本、関、佐多

（敬称略）